



三阴吉良之庄  
荻原蓬之亭著

まよふ草原此始よ繁  
まよふ草原の地ハ久し

まよふの演藝もや國隣

折こころはれ今月去秋

懐まれとねも大に序もきま

見巻の書れ埃もひけり

一法利からてあき二人連

まよふ行むまよふ跡

何とあはれいづ橋れ新からず

まよふ相場も市の休日

之

花逸

序草

風二

羽鳥

茶文

里考

執筆

後少いを親音の御子かきさるる

走りこころさけ、倦言

拿りてまた儲上れ俳諧名

馬乃あはてを常屋入

けさぬいり一柄し鼻噴氣

十夜も丸おし責とせむ証

かたきや<sup>キ</sup>熟屋乃通、<sup>キ</sup>取つえ

こころを強く居て腰れ弓

そしと謙研く水くこの月

けし怖く、略れこく

馬のありて病よきとて取陀答

丸素のしりぬるを喉子

身乃急を飾くもれ、作掛

ちと鉄字をわけの明星

道

之

二

系

心

号

之

考

号

心

冬

二

考

丈

し、すハ山甲入子 湫此音

唐之たきいくく 運苗

蒙州のまかこりて 切艾

口にて山入りよきまされる空

口お乃山伏山ををやいなる

福うらえれ 徳川 摺

高き山ハ故事と意く 毛のりん

うれおぬ之ぬれ 雷

網此子の泥もぬくり 握飯

具那ハはらう 膠よ 彦 隠

赤くと 塗るハされと 何乃 神

川もあつらと 嵐 晴ゆく

一 籠 拾ふと けきと 嵐 晴ゆく

お撲れ 地より 端あきま

色

之

二

景

ハ

音

意

考

意

色

を

二

考

文

智恵のり時親父のちがし

候々きかへて酒のし

けりてもちい津の町み十丁

下云れ行を裾へそく

清月尺乃間夕うつくい候所

末苗弁りし七ツかこり

る世くあらま家尺れけりら

もやそり毒いふきむれ立

ゆ川きりと札う冷家初れ膝

入道乃身て帽の好物

山中れ湯母とあ川たて瓶ハせ

のそりる顔く鼻かんさ紙

振あしてハちら思あまの作花

火燵と上家柳の姉と謎

造

之

二

葉

吹

考

之

乃

差

色

色

之

二

丈

お勅乃之時此間の日思長き

喜しき事なむ思ふは傳

集法より池側の程れらぬあり

寂しあしと羽織志の事

朝着りてそこの振と此親

之口もくぬ谷の灯明

響きゆく大根はきく繪

遠くをゆくはゆくはゆく

唐錦は走る堤小服さ

換衣の事胸の平盤

宵の月をみるは思ふ事

一志ありはくはくはく

捨れと又も固法をくはく

腰帯の事と竹の湯上り

色

事

之

色

汚

二

心

心

事

之

色

考

二

丈

けし下乃八卦の妙きたいわり

角と曲るくも世に門

梅もまると咲ぬく梅も早椿

石事ハまると文箱のま

透るものれきら世無信也の柳

柳もまるとまるとまるとまると

雲乃まると追へく月れまると

骨折るまると折るまると

ぬきまるとまるとまるとまると

毛れぬけまると白鹿のまると

お法義とまると海乃まると

斬るまるとまるとまるとまると

聖もまるとまるとまるとまると

夜とまるとまるとまるとまると

造

早

之

鳥

汚

二

其

と

草

之

二

考

考

文



はくはれ志望を世智のひきま

戸のたぐりれお下り月口

根居れ、根会流の捌ちり

はみきり炯と純子盃

尾上りきる盆合きく、庭の松

却らりい事と教く

瘡いも打ちあはし編針

くられ凝りくいり焼

ほくまはきる盆屋の瘡り家

梅い折らんと赤いさや竹

向しとほ方れやう好 猿衣

ほら言さらぬ山一月代

あゝ茶れ湯多ちりく村の葉

鳥籠はたきけと肌を

造

第

之

二

考

考

考

之

第

之

二

考

考

文

名

形改し服きせてハ右事の場

急

砂とあひせく分れ 鬪

急

組比留上様ハにまめてうき相

之

翁より瘧乃ちあまこ大形り

二

一挺志加る翁まきく川より

考

けられ日和をこねる子

考

ふらふ草のまゝ花れま家乃ちね

文

つけるといふよき万葉

考

四季吟

蝶くやまゝハ歩ま 間一と

序  
州

足さふと足ぬ火てとあしあし堂

口へおれ名を忘れけりまれ茶

とく香やこけりの縞ハ水くろね

四季吟

里考

のこぼれとて暮らさるる柳の  
野一松葉とよりけり 異さるる  
席 啼や意を思ふとやせふ時  
昔れあやふきりなふいふけと

全

茶丈

明けのまへに明けの山さくら  
虫や屋敷の帯の帯とらへ  
あついやとて空をわらふ乃礎か  
水もやあまへくまを 詠れ群

四季吟

風二

候はれ事せて候遠のあり柳のれ  
岩根く志あり出さる清水家  
秋の路く淋くハ喜ぬうつれ  
風やうてきい葉まハあけ

全

習鳥

瘦打も物も如桃乃花さる  
晴一羽とえく天一 杜若  
鳥く枝屋やうや生陰より  
裸身く時ふやうふ柳の部

春

花逸

村言れむと一副毛かきこれ  
佛さ一景報まらして如 涅槃像

夏

風貯ふとのゆるハ程 蚊帳の如  
一所、尻乃る魚、さこれ

種

色まけとて葉はらり魚 梅塚  
かきぬるは所忌も交とけけの菊

冬

さきさけ井戸ふとらぬ 氷の如  
枯のう柳とやふ紫 柳の如

良夜とるふ花もうらやま  
既令のはまふ光りか  
なれハ

荏来之

やがてと見えし月人柱とゆかり

蜜曆九卯年八月

京橋治梓

